

方城大非常の慰霊碑に導かれて

祭り当日の8月4日、慰霊碑の前で手をあわせる若者たちの姿がありました。大正3年12月15日、日本史上最大の炭鉱爆発事故「三菱方城炭鉱 ガス炭じん爆発」が発生。671人ももの尊い命が失われました。かつて、坑内災害を「非常」と言った筑豊で、「方城大非常」と呼ばれた大災害でした。福圓寺(伊方)に納められている犠牲者の位牌にも「横死諸霊」と記され、突然命を奪われ非業の死をとげた無念の思いが「横死」の二文字に込められています。

しかし、今では「方城大非常」の発生から104年がたち、悲惨な事故のことを知らない人が多いのも実情。「方城山神盆踊り大会」を主催した大石勇介さんもその一人でした。慰霊碑がある山神社跡のそばにあった町民プールで子どもの頃よく遊んでいた大石さん。進学・就職と福智町を離れ、気付いたときには町は合併。7年前、京都から帰省した際、久しぶりに目にしたのは荒れ果てたプール跡地でした。「またこの場所で人々が集うイベントをしたい」。そんな思いから草刈りや掃除を始めたある日偶然、慰霊碑を目にします。何の碑か調べたところ「方城大非常」の事実を知り、胸が熱くなったといいます。

地底のヤマの魂にささげる若者たちの祈りと唄

2年前、大石さんが友人である瀬川信太郎さんとプール跡地での音楽イベントを企画。しかし「方城大非常」で亡くなり、地底に埋もれたままの人が多くいることを知り、犠牲者をしのぶ盆踊り大会にしようと取り組みの方向性を定めました。

かつて旧方城町で、社会福祉協議会主催の盆踊り大会が行われていた頃に口説かれていた「方城非常唄」。その事故の悲しみを込めた唄の存在を知り、当時の貴重な音源テープを元に大鼓と唄で再現。平成30年8月4日、十数年ぶりに復活した方城地区の盆踊り大会で、約40年前に途絶えた非常唄が、慰霊碑のそばで響き渡りました。

来年も再来年も続けていきたい

慰霊碑を発見したとき、この地で必ず盆踊りをやるべきだと感じました。やるからには一回で終わるような取り組みにはしたくありません。「来年もここで会おう」と言い合えるような行事に、町の人と一緒に育てていきたいです。



郷土玩具「山響屋」店主
瀬川 信太郎さん
(福岡市在住・長崎県出身)

特集 ここまでまた、めぐり逢う。

熱い思いが引き寄せるつながりのチカラ。



Chapter 1 方城山神盆踊り大会

かつてにぎわいを見せていた方城地区の盆踊り大会の復活を目指した若者たちの挑戦



Chapter 2 バンブースペースプロジェクト

何もない竹林を壮大なイベントスペースに変えた若者たちのつながり

——2つのイベントの実現と人々の思いにせまる。



今を生きる子どもたちに伝え残していきたい

子どもの頃、両親や友達と訪れた地元の夏祭りの思い出が今も強く心に残っていて、何か次世代の子どもたちに残るイベントができないかとずっと考えていました。そんな中「方城大非常」の事実を知り「地元の者としてこの歴史を風化させてはいけない」と、慰霊の思いを込めた盆踊り大会の復活を思い立ちました。

数多くの尊い犠牲の上に今があることを語り継ぎ、この夏祭りを来年、再来年と回を重ねるごとに地域の絆を結びつける行事にしていきたいです。十数年後、今の子どもたちが大人になったとき、この場所が彼らの思い出の場所になっていることを願っています。

手打ちうどん飲食店「たぬき庵」店主
大石 勇介さん
(福智町出身)

合併後初、十数年ぶりに復活した方城地区の盆踊り大会。10店舗の露店もつらなり、会場は約200人の町内外の人たちでにぎわいをみせました。久々の再会を懐かしむ地元の人たちの姿が印象的でした。



迎えた当日のイベント開催前、山神社跡にある慰霊碑の前で深く手をあわせる関係者。写真右上は、三菱方城炭鉱の象徴であった二つの竖坑と煙突。



三妻方城炭坑非常の歌
 尊前田川、名も高き
 三妻方城炭坑にて
 坑内ガスが破裂して
 八百余名の犠牲者を
 出した哀れな非常
 項は大正三年の三月十五日
 時も午前九時過ぎに
 突然ガスが破裂して
 天地も崩れる音共に
 黒き煙りは坑口に
 渦巻き下り噴き上る
 これに驚き事務所は
 スワニ平坑内非常だと
 騒ぐその間もあはれそ
 ろまた坑夫や道狭しや
 女や子供や老人が
 気大いごとく泣きまわ
 速く坑内の人々を
 助けてくれと叫ぶ声は
 突に哀れな限りなり
 この時吉田坑長は
 全部機械はもうまいて
 ガスのかけんはおきられ
 捜索入夫は処置なし
 なれども坑内一面に
 激しき破裂のその為
 柱や柱はみな折れ
 天井もしおが落ちて
 崩れし断崖がたにつけ
 死人や外傷人助けられ
 助けられたる人々は
 嬉しき涙であがりくる
 あがれは子供や老人が
 飛びつき共うれし泣き
 死したる人は無残にも
 手足がけたり首が飛び
 彩色や黒焦げで
 体の崩れし人もある
 見るも身の先がよだんにも
 医師の検査も済んだら
 白木の棺にいれられて
 野辺の送りをする
 唄 池本喜代蔵
 昭和十一年十月五日

↑約40年頃前まで方城で唄われていた「方城非常唄」。炭鉱爆発事故の様子が事細かに伝わる歌詞で、かつて事故を目撃した池本喜代蔵さん(伊方)が生前、町の盆踊りで必ず口説いていました。時代の移り変わりとともに、いつしか途絶えていましたが、平成最後の夏、慰霊碑の前で唄が再現されたとき、犠牲者を弔うかのような花火が夜空を彩りました。

朝鮮人犠牲者にささげる演奏

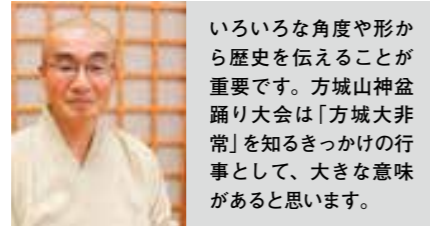
昨年、旧産炭地の民俗学の研究で、福智町を訪れた際に大石さんと出会い、草刈りなど準備を手伝うようになりました。方城炭鉱では、朝鮮人も犠牲になったかもしれないと言われています。この地で朝鮮民謡を演奏できたことに深い意義を感じました。



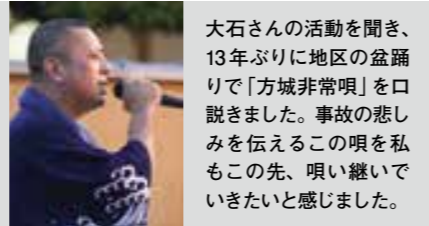
寄贈された提灯が飾られ露店が囲む中、バンド演奏や朝鮮民謡など様々なジャンルの音楽が山神の地に流れました。



7月の猛暑の中、手づくりでの構立ち上げ。



大非常犠牲者の供養を日々欠かさない
富永 秀元 住職(福圓寺)



今夏「方城非常唄」を口説いた
田丸 義雅さん(伊方)



雑草除去する前④と切り拓いた後の広場。

つながる思いが山神跡に

若者たちが企画した盆踊り大会は荒地の整備からのスタートでした。昨年の3月から草刈りを始めた大石さんは、山神社跡地周辺を毎日清掃している迫本澄和さん(伊方)と出会います。迫本さんは「不法投棄が絶えない山神社跡、このままでは犠牲者の方に申し訳ない」と数年前から清掃活動を開始。この地を生かせる場所にしたいという共通の思いを胸に二人三脚の草刈り作業が始まりました。広大な土地に生い茂る人の背丈を越える雑草。その整備は途方もない作業でした。取り組みの趣旨を伝え、会員制交流サイト(SNS)のフェイスブックで有志を募ったところ、一人またひとりと大石さんの思いに共感して仲間が加わり、イベント3か月前には約20人から人々が駆けつけ、荒地地を切り拓くため、炎天下の中、人知れず多くの汗を流していたのです。

ゼロから切り拓く

合併後はじめて響く鼓動
 「荒地地を生かしたい。方城の盆踊りを復活させたい。みんながつながる場所を創りたい。そして大非常のことを伝えていきたい」。一人の若者の熱い思いが仲間を呼びカタチになり、3町合併以降、途絶えていた方城地区の盆踊り大会を実現させたのです。

かつて、国や故郷を発展させてきた炭鉱。その影に多くの犠牲があったことを旧炭鉱町に住む私たちだからこそ決して忘れてはなりません。方城山神盆踊り大会は、過去と現在をつなぎ、地元の人が集う場として地域をつなぎ、そして「方城大非常」を風化させない行事として、未来をつないでいきます。

盆踊り大会の準備は、必要なものをそれぞれが持ち寄って整えられました。櫓は田んぼに放置されていたものを譲り受け、太鼓は有志から借用。特設ステージでは6組のアーティストが無償で出演。魅力的な10店の露店も集まり、祭りの舞台が創り出されました。

「ここで、とにかくやってみよう」。この言葉を胸に、若者たちは動き始めた。盆踊り大会復活を果たすまでの道のりをたどる。



大学生30人と住民が協力して創り上げた交流の場、うっそうとしていた竹林が生まれ変わりました。

そんな福智は、 夢のような 場所でした。

大学生×住民×バンブー



東京・福岡の大学生が竹林を大・大・大改造！

町外の大学生が企画運営するバンブースペースプロジェクトが8月4日と5日に開催されました。このイベントは、東京在住で福智町草場(市場)出身の日高将博(ひたかみまさひろ)さんが、実家の眠っている竹林を町のため有効活用したいと思い立ったのがきっかけ。東京と福岡の大学生に相談し、賛同した大学生らと3か月かけて準備を進めました。イベントのシンボルとして創った「ツリーハウス」をはじめ、自然と音楽が融合した「森の音楽祭」、地元食材を使った「舞台」やおしゃれな「カフェ&バー」、「アートのスペース」から「星空シネマ」まで、全て竹を使ってしつらえ。企画から運営までこだわった学生たちの情熱が、地元住民の協力を得てカタチになりました。

このつながりと継続を力に

東京参加メンバーのリーダーを務め、イベントをおとして僕自身成長できました。昨年からの積み重ねてきた福智町との関係を継続し、今後は、東京のイベントで町のPRもしていきたいと考えています。



明治大学[東京]
情報処理学部 3年
星出 康平さん
(飯塚市出身)

福智町は夢が実現できる場所

建築を勉強していて、会場のデザインを担当しました。福智町は大学で学んでいることを形にし、やってみたいことができる夢のような場所。東京にはないココにしかない良さが福智にはあります。



武蔵野美術大学[東京]
建築学科 4年
鶴元 怜一郎さん
(北九州市出身)



ツリーハウスづくりで学生を指導

宮大工として長年活躍していた赤星勇(あかほしゆう)さんが、3か月かけて学生を指導しツリーハウスを制作。イベント初日、大学生から感謝の寄せ書きが渡され「学生の志に感動した。一緒に進める作業はとても清々しかった」とふり返りました。

地元のみなさんの理解に感謝

赤星さんと一緒に「ツリーハウス」制作に携わることができ、良い経験となりました。地域イベントは地元の人々の理解が一番大切。町外から来た私達を心よく受け入れてくださり、感謝しています。



西南学院大学[福岡]
児童教育学科 2年
井上 梨央さん
(福岡市出身)

Bamboo



Chapter 2 Fukuchi Bamboo Space Project
フケチバンブースペースプロジェクト



この町を知らなかった大学生が、何もなかった竹林を舞台にプロジェクトを展開。「自由な発想の学生たちとこの町を盛り上げたい」。そんな一人の地元出身者の思いが学生たちの心を動かし、ここにしかない空間を創り上げました。

イベント前日、ツリーハウスの補強をするイベント主催者の日高将博さん(手前)と東京から来た大学生たち。今回「町に残るものを創りたい」という思いからツリーハウスを制作。5月から7月まで月2回、福岡市に住む大学生が福智町を訪れ、コツコツと作りあげていきました。

楽しむことが周りを変える

福智町のイベントに携わる中で、まずは自分が楽しむことを大切にしてきました。自分自身が楽しむことで、相手や周囲の雰囲気もさらに和やかになることをここで感じる事ができました。



九州大学【福岡】
薬学部 3年
轟木 亮太さん
(福岡市出身)

子どもたちの最高の笑顔に感動

福智町は川や森があり、青森にいるようで懐かしく感じました。夢は文部科学省で教育に携わること。企画担当したサマースクールで子どもたちの純粋な笑顔が見れて最高でした。



中央大学【東京】
文学部 1年
三浦 菜月さん
(青森県出身)

7月31日から7日間、草場地区集会所に滞在した大学生たち。「自分の時間やお金、いろいろなものを犠牲にして頑張っている学生を応援したい」と口をそろえる地域の人々。期間中、食事を提供するなど積極的にサポートしてきました。大学生たちはクラウドファンディングでこのイベントの寄付を募り、自分たちで資金を調達。集まった寄付金で実現させ、町や将来のことを真剣に考え、町の活性化に引き合ってくれています。

広がる学生とのつながり

この町を知らなかった学生たちと町が繋がったのは、これまでではあり得ない、まさに奇跡的なことでした。さらにこのプロジェクト以外でも、町の行事で学生たちが力を発揮。福智町と大学生とのつながりは、子どもたちの体験や教育面を中心に、効果を生み出しています。

故郷を知りまた好きになる

生まれてからずっと草場に住んでいます。大学生の「この町にあるものは、すごく魅力的」という言葉に今まで身近で気付かず、あるのが当たり前だった自分の町の良さを発見できました。



草場地区公民館
館長
八隅 太郎さん
(福智町教育委員)

人を呼ぶめぐり逢いが 未来へつながる

「草場地区で築いたつながりが町全体のつながりへと発展していけば素敵ですね」と語るイベント発起人の日高将博さん。「学生の力と町のニーズをつなぐことが自分の役割。大学生の若い発想や力を町に加えて、新しい『変化』をもたらせば…」このイベントはそのひとつのきっかけです」と力を込めました。ふるさとを離れ、今は東京に住んでいますが、目を閉じれば福智山や彦山川のあるふるさとの情景が浮かんでくるといいます。この夏福智で実現した「方城山神盆踊り大会」と「バンブースペースプロジェクト」。若者たちの熱い思いが人と人を結びつけ、人を呼び、また新たな人とのめぐり逢いをもたらしています。人を動かす人間力が新たな地域資源を生む。壮大な若者たちのチャレンジはこれからも続いていきます。

竹林を変えた 大学生と 学び遊ぶ。

プロジェクトの2日目、東京の大学生たちが福智でサマースクールを開校。忘れられない夏の一日が子どもたちの胸に残りました。

笑い声が里山に響く

大学生によるサマースクールが8月5日にバンブースペースで開校され、福智の小中学生約20人が参加。竹の灯籠やけん玉づくり、スイカ割り、そうめん流しなど各プログラムを企画運営し、子どもたちの思い出に残る夏の一日を過ごしました。参加費はすべて無料。子どもたちの輝くような表情を見て「地区に子どもの笑い声が帰ってきた」と草場の人たちは目を細めました。中高生の進路相談もあり、勉強や将来の悩みに現役大学生がアドバイス。大学生と直接対話し、心通わせることで視野がさらに広がった様子でした。



大学生×子どもたち×体験

中高生は「未来」、小学生は「自然」をテーマにしたサマースクールのワークショップに草場地区と生力地区の子どもたち約20人が参加しました。



日本財団勤務
日高 将博さん
(東京在住・福智町出身)

来年に
向けての
振り返り

中高生の
進路相談
もあった

最高の
夏の思い出

バーハウス
作成中

会場は
大学生が
デザイン!